

## キャリア教育の理想と現実

－教育現場で感じる個々の資質を育てる教育とは－

伊藤 由美子

愛知みずほ大学人間科学部

### 1. はじめに

本稿においては、大学（本務校）におけるキャリア形成支援関連科目として「生活経済学」の授業を通じて受講生の資質の変容を明らかにするとともに、その変化に授業担当者としてどのように対処することがキャリア形成支援としての効果を挙げることができるのかについて考察する。なぜならば、キャリア教育の推進に伴い、その評価、検証がいまや重要な課題となっており、一律的な評価ではそぐわないことも指摘されているからである。したがって、ミクロ的な授業評価を積み重ねることは、キャリア教育全体を評価する上で、ひとつの方向性を示すものと考えられる。

さて、キャリア教育におけるキャリア・カウンセリング理論には、理論家の実践経験から気づく事柄を類型化あるいは理論化したものが多い。また、自らの体験に基づいた知識や経験知を通じてクライアントに対するカウンセリングを行うなど、上野（キャリアデザイン学会）や、川崎（日本キャリア教育学会）らは、就職支援は、キャリア教育というよりもキャリア形成支援と呼ぶ方が現状に適していると言っている。生活経済学は、その意味でキャリア形成支援関連科目のひとつと言えるし、自らもそのような考えに基づいて授業を設計してきた。

### 2. 生活経済学の授業設計の概要

半期15コマ選択科目として、前半では情報提供を主とした講義形式として、レジュメを配布した。特に教科書は使用せず、インターネットでテーマ毎に情報検索したものや、本・雑誌の抜粋、新聞の切り抜きとTVの特別番組やニュースなど、目で見て理解させ、耳で聞き理解を促すものを利用し、毎回それぞれの理解度を図るためにレジュメを活用した。

後半は、ライフプラン作成作業の時間とし、作業がスムーズに進むようにポイントを押さえた解説などを加えながら、個人の質問に対しても全員で共有すべきものは注目を求め、聞かせながら、平均的な情報の共有に努める。

### 3. 「生活経済学」の基本的目的とライフプラン作成による行動目標

本来学生たちが、社会へ移行するにあたり考える「働く」「家庭」「生きる」などのイメージが乏しく、社会へ出て働くことや家庭を持つことは、なんの根拠もなく「なんとかなる」「なんとか乗り越えていけるもの」と漠然と思っているように日頃の言動から感じる。そこで、生きていくために最低限の情報を得て、基本となるライフプランを提示することで、生活に自信をもって一歩が踏み出せるようにすることを基本目標とし、それぞれの人生の分岐点（トランジション）での見直しを図り、新たな目標や計画に対してチャレンジする発展的能力を育成することを最終目的とした。

一回の授業を構成する上でも、前半では基礎的な情報や現代社会で、取り上げられている問題などを提起しながら、個々の基準を持たせ、商品やサービスの選択を行ない、個々の人生における「豊かさ」をプランに生かしていくことを目標としてカリキュラムを構成した。

### 4. 学生の年代比較－ライフプラン作成の4つの要件についての調査－（2001、2004、2008年比較）

調査年度の設定について

2001年4月より「生活経済学」を開始したこと、2008年度は「授業に関する点検」年度に当たることから対象とした、2004年度はそれぞれの中間点に当たることで比較対象とした。

アンケート実施について

2001年度よりそれぞれの「豊かさの基準」を知り、的確なアドバイスをするために、4月の第一回目の授業時に行なうアンケートの内容は以下の5つの質問を自由に書いてもらう形式とした。

- ①あなたにとっての「幸せ」とは、
- ②ゆとりある生活とは、
- ③ゆとりある生活で、なくてはならないものは、

④将来の目標は、

⑤理想とする生活環境について

アンケートの記述内容からキーワードを年代別に振り分けてみたところ変化が見られた。特に変化を感じたのは次の4項目である。

夢<sup>1)</sup>：2001年は夢（理想、希望）に関する〔自分の夢や目標に向かっていくこと、そしてそれを達成することが幸せ〕の記述が多く見られるが、2004年、2008年は消え〔社会人として労働時間8-9時間の仕事につき人と人のつながりが良好であれば幸せ〕となってくることから「普通の生活が送れること」が彼らの夢となってきたことが読み取れる。

時間<sup>2)</sup>：2001年は、「時間」としての捉え方は（個人としての時間）という言葉のみでの表現がほとんどであるのに対して、2004年は個人から生活へと変化し、2008年は、お金との関連としての時間（お金があっても時間がない）に変化し、余裕のない状態を表している。

安定<sup>3)</sup>：2001年は精神的安定、心の安定（人間関係：家庭、友人、恋人）を求めるのに対して、2004年は居場所（居場所としての住居の存在）を重視し、2008年は普通であること（経済的安定が強い）を重視してきた。

お金<sup>4)</sup>：2001年は「お金」という言葉での表現がほとんど全てに書かれていたのに対して、2004年は、使途が明確になった「お金」の記載となり、2008年では、生活にとって必要最低限のお金（普通であること）を維持することの難しさを感じる記述が増え、ゆとりを手に入れるための経済から安定・安心のための経済と変わったことが読み取れる。

## 5. 学生の変容に対して何を対処すべきか？

筆者が2001年当初に「生活経済学」の、シラバス作成時は、キャリア教育を意識し、ライフプラン作成は様々な人生の転機（トランジション）を経済的な側面から考えるように、予測可能なものとして捉えさせることを目的としたが、初年度以降、毎年授業時と終了時に複数回行なう学生アンケートから、学生の内面的な思考の変化を追ってみた結果、将来のためのライフプランという姿ではなく、生活防衛のためのライフプランという思考が見られてきた。

日本経済のグローバル化、労働者派遣法の改正以降、急速に広がった労働の多様化、非・正規雇用の拡大など、これまでの学校から職業社会への、一貫したパイプラインが分かれているといった社会的背景が学生生活の中まで浸透してきている。そのような環境の変化の基で、ライフプランの作成はどのような意味を持つのであろうかと考えた時、これまでとは異なり、まず、彼らの多くの意識である「安定」「安心」を与えるものとしての役割が考えられる。彼らが求める「普通に生きること」「平均的

な生活」をイメージした生活をライフプランの作成を通じて与えられてこそ、初めてもう一段階上の、キャリア形成へとチャレンジする足がかりとなるのではないだろうか。

## 6. 大学に期待される取組み

2008年12月24日中央教育審議会総会<sup>5)</sup>において、「学士課程教育の構築に向けて」「高等専門学校教育の充実について」の答申が文部科学大臣に手渡された。「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育のあり方について」の諮問が文部科学大臣より渡されたことが報告された。この中で大学に期待される取組みとして、①キャリア教育を、生涯を通じた持続的な就業力の育成を目指し、教育課程の中に位置づける。②豊かな人間形成と人生設計を資するものであり、単に卒業時点の就職を目指すものではないことに留意し、アウトソーシングに頼るのではなく、教員が参画してキャリア支援形成に当たる。と明確に表記されたことを受けて、それぞれの高等教育機関でも取り組むべき方針を固める時期にきたのではないだろうか。

そこで、キャリア教育の定義は様々な人が行っているが、筆者は中でも、「キャリア教育とは、成長過程において、それぞれの教育が必要であるように、意思決定能力や体験型学習に、キャリアを関連させることで、アカデミック科目で扱われる技能育成と共に図れ、雇用へのチャンスや適応力の育成が図れるものである」と捉えている。

高等教育機関において、「キャリア教育学」という科目を新たに設置するのではなく、それぞれの専門教員が、キャリア教育の本質を理解した上で、それぞれの科目の中で取り組めないか、また、初年次教育<sup>6)</sup>の一環として取り組むのも一つの方策かとも考える。

## 7. おわりに

大学の教育現場での現状として、指導困難な学生をも受け入れざるを得ないことを考えると、キャリア支援、キャリア形成を行なうことが望まれるのは周知の通りであろう。大学教育の中で、賄えるものは極めて僅かで、現実的に就職支援を行なう我々が、細やかな文章添削から面接対策、精神的な面をも、聞き取り対応しなくてはならないのである。

キャリア形成において「生きる力」をつけ、個々に対しての支援を行なうことはクライアントの数だけ、キャリア支援の手法が存在することを理解して、それに対して支援を行なうことが求められる。一律な支援は有り得ないと思えるべきであろう。

以前から多くの研究者が「初等教育・中等教育・高等教育の連携及び学内教職員の連携、学校と地域との連携な

ど」全ての大人が子どもを育て、将来につなげるための必要であると言われてるように、キャリア教育に携わるということは、指導者が「個々の学生達が自信を持って人生を選択できること」を支援するために、資質を高め、それぞれの指導者がキャリア教育を理解してそれぞれなりに消化して、それぞれの指導者（教員）の授業の中に取り込み、学生に還元することが求められているのではないだろうか。

#### 【引用文献】

1. 渡辺三枝子編著 2007『キャリアの心理学』
2. 上野允子 2007『大学のキャリア支援』経営書院
3. 授業設計（近田）の文献紹介から探す
4. 岩脇ら

#### 【注】

##### 1) 「夢」に対する補足記述

2001：夢や目標に向かっていく時やそれを達成することが幸せ。欲しい物を手に入れる。自分自身が成長でき、不安を逃す精神力を持つ。生きがいを持つ。

2004：自立する。仕事に就く。起業する。正社員になる。

2008：睡眠時間 7 時間、労働時間 8-9 時間、3 食きちんと食べれる。家族揃っての食事。家族。人並みの生活。

##### 2) 「時間」に対する補足記述

2001：自由である。やりたいことができる時間。自分の時間が多。一人で考える時間。

2004：自由な時間。休める。のんびり生活できる。相談相手が居て楽しく話ができる時間。

2008：時間に余裕がある。息抜きできる自由な時間。落ち着ける時間。時間にゆとり持つ。

##### 3) 「安定」に対する補足記述

2001：家族が健康で居る。友達が近くに居る。仲間がいる。好きな人と一緒に居る。精神的余裕がある。楽観的に生きる。一緒に生きる人が傍に居る。

2004：学校や職場での居場所がある。笑顔が絶えない生活。家庭。帰る場所や自分の落ち着く居場所。車・電化製品が整った家庭。住むところ。

2008：ストレスを貯めない。暮らしやすい環境と家庭。仲間が近くに居る。暖かい家庭。人とのつながり。住居は緑が近い。

##### 4) 「お金」に対する補足記述

2001：万馬券が当たる。適度なお金がある。少々余るお金がある。自由に使えるお金。経済的に豊かである。財産はあったほうがいい。

2004：保険や税金が払える最低限の生活ができる。預貯金がある。預貯金ができる。生活に必要なお金。欲しいものが買える。

2008：財布にいつも 8 千円以上ある。人並みの生活ができるお金がある。

5) 教育学術新聞：2009. 1. 14 付

6) 初年次教育とは「高等学校から円滑な移行を図り、学習及び、人格形成に向けて、大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく新入生を対象とした教育プログラム

ノート